

フランス革命における恐怖政治の 財政指導者—カンボン—

小 林 良 彰

- I カンボンの存在はロベスピエール独裁の否定に通じる
- II 上層ブルジョアジーにたいする闘争
- III ロベスピエール派との対決
 - 公安委員会からの引退
 - カンボンの財政委員会は公安委員会から独立していた
 - インド会社清算をめぐるロベスピエールとの対立
 - ロベスピエールは銀行家を攻撃し、カンボンはこれを保護した
 - ロベスピエールによるカンボン財政の攻撃
 - カンボンはロベスピエール打倒の第一線に立った
- IX テルミドール以後の失脚
 - 減びゆくモンタニヤールと運命をともにした
 - カンボン財政の廃止と政商、上層ブルジョアジーの逆転勝利
- X カンボンの軌跡から読みとれること
- XI カンボンを知ることが明治維新の見直しに通じる

I カンボンの存在はロベスピエール独裁の否定に通じる

カンボン Cambon の名はほとんど知られていない。概説書の中にも登場せず、フランス革命を専攻する学者の間でもほとんど知られていない。また、これを取りあげる人もいない。マチエの『フランス大革命』の中で、断片的にとりあげられているだけである。

私はずっと以前から、マチエのとりあげたカンボンの行動について興味をもった。彼が、フランス革命の有名な指導者すなわちロベスピエール

Robespierre, ダントン Danton, マラ Marat と匹敵するような役割をもち、ことによると、彼ら以上の役割をもっているのではないかと着目していた。研究が進むにつれて、この考え方が固まり、フランス革命の本質を論じるときには、有名な革命家よりはむしろ、カンボンの方がはるかに重要な意義をもつと思うにいたった。

なぜなら、彼は、恐怖政治の時代に財政を指導し、最終的な段階で、ロベスピエールと対立してこれを打倒する側にまわったからである。人はロベスピエールを独裁者だという。ロベスピエール独裁、公安委員会の独裁というテーマは常識になっている。しかし、この常識をくつがえすものが、カンボンの役割である。カンボンは、たえずロベスピエールと対立し、最終的にロベスピエールに勝った。また、国家財政の実権をにぎり、これをロベスピエールに渡さなかった。そして、財政政策は、ロベスピエールの意思どおりには動かず、カンボンの意思にそって動いた。

財政をにぎらずして独裁者といえるだろうか。ロベスピエールも公安委員会も、ついに国家財政の実権をにぎることなく消滅してしまったのである。カンボンの姿を正確にえがくことは、ロベスピエールの独裁や、公安委員会の独裁が虚構であったことを証明することになる。そしてそれは、とりもなおさず、ジャコバン派の独裁とかサンキュロットの独裁とかいうテーゼの虚構を証明することにもなる。

またこのことは、恐怖政治の時期ですらも、実はブルジョアジーの実質的支配がつづいていたことを証明することになる。すなわち、フランス革命のブルジョアの限界を示すことになる。多くの歴史家が、フランス革命はブルジョア革命ではあるが、恐怖政治のときに、そのブルジョア的限界を越えて小市民、サンキュロットの権力が実現し、ブルジョア革命であるにもかかわらず、反ブルジョア的な性格をもつに至ったと思ひこんできた。その根拠がロベスピエールの独裁であった。

フランス革命におけるロベスピエールの独裁、あるいは恐怖政治を過大評価する傾向が、そのまま世界史の中の法則性に高められた。こうしたものがなければ、典型的なブルジョア革命とみなすことができないと思うような傾向が支配的になった。こうした考え方が、たとえば明治維新の解釈にもちこまれてきて、日本における明治維新は不徹底であるといわれる。同じく、イギリス革命やアメリカ独立革命にもこれがもちこまれて、フランス革命にくらべると、徹底的ではないなどといわれている。

私は、なにもロベスピエールや公安委員会、恐怖政治の果たした歴史的役割を否定するものではない。それはそれなりに、一つの注目すべき歴史的現象であった。ただし、その過大評価は慎まなければならないという意見である。たしかに、ロベスピエールは大きな権威をもつに至った。また、それにふさわしい人物であった。しかし、人物の偉大さと、権限の大きさとは、多くの場合、一致するものではない。この点に、歴史家の陥りやすいわながある。叙述のときに、人物の数を制限し、説明を単純化するために、恐怖政治ならば、ロベスピエール1人に単純化してしまう。そのことによって、ロベスピエールを高く評価する人も、あるいは、彼を流血の独裁者として非難する人も、ともにロベスピエールの権限の過大評価という誤りに陥っている。

少なくとも、財政の分野では、ロベスピエールの権限がほとんど及ばなかったということを、以下の事実が証明することになる。

II 上層ブルジョアにたいする闘争

ジロンド派追放以後、カンボンは、両面の敵にたいして闘争をつづけた。一方は、ロベスピエール、ジャコバンクラブの影響を受けている国民公会の左翼にたいする闘いであり、他方は、彼が革命戦争の遂行にたいして有

害とみなした、上層ブルジョアジーの勢力との闘いであった。彼もブルジョアジーの一員であるが、彼と上層ブルジョアジーの間にも、またはげしい闘いがすすめられた。カンボンは、金融業者と共和国のあいられないことを力説した。

「今や、金融業者と共和国の権威確立の間に死闘が存在する。自由の支配をうちたてたいと思うならば、公的信用にたいして破壊的な、すべての会社を殺さなければならぬ」。

このような方針から、カンボンは、8月24日、財政委員会を代表して銀行家、大商人の組織した株式会社、すなわちケース・デスコント、生命保険会社その他の株式会社を廃止することを国民公会で要求し、可決させた。またカンボンは、ドローネ Delaunay とともにケース・デスコント Caisse D'Escompte の資産の状態を点検し、その清算を監視する任務をまかせられた。¹

この時代、まだ株式会社は全国的に普及していたわけではなく、ほとんどの企業は個人企業か、あるいは二、三人の合資会社であった。株式会社としては、中央銀行の役割をはたしたケース・デスコントをはじめ、生命保険会社、パリ水道会社、インド会社など、一業種に一つの独占的な会社が、国王によって認可されていた。

これらの会社の株は、全国的な市場をにぎる大商人やバリの銀行家、一部の大工業家など、上層ブルジョアジーの中で売買されていた。これらの株は、会社の豊かな資産を背景として、高い価格で売買されていた。ところが、政府の発行する紙幣（アシニア）は、価値が極端に下落して、そのため一種の紙幣インフレが進行していた。

カンボンは、革命政府の財政をあずかる者として、アシニアの価値を維持するために奮闘していたが、アシニアの下落を阻止するための手段として、株式会社の株、証券の流通を停止しなければならないと考えた。なぜなら、株式会社の株や証券が、貴金属と同じく実物価値をもち、これとアシニアとの交換のときに、アシニアが買い叩かれていたからであった。

カンボンは中流のブルジョアジーとして、このような株式会社とは関係がなかった。そこで、彼が株式会社に集まる上層ブルジョアジーとの闘争

1 Archives parlementaires, t. 72, p. 701.

をおこなったのである。

9月28日、カンボンは国民公会で発言し、3000リーブルを越える年金については、3000リーブルの限度までを支払い、それ以上の額を切捨てることを提案し、これを可決させた²。この政策は、高額年金の所有者が大財産家であった当時の状態からみて、上層ブルジョアにたいする破壊的な政策になった。

8月24日、カンボンは財政委員の名において、累進強制公債についての完成された原案を国民公会に提出し、これを可決させた³。カンボンが、この政策に対して、一貫した熱意をもっていたことを示すものであった。累進強制公債は、上層ブルジョアの一年間の収入のほとんどを強制的に借り上げるものであった。そのため、ジロンド派が憤慨し、ボルドー、マルセイユ、リヨンの大商人がジロンド派を支持して反乱を起したのである。

III ロベスピエール派との対決

公安委員会からの引退

カンボンの公安委員会は7月10日まで続いた。その間に、ジャコバンクラブと過激派の勢力から激しく批判され、ついに退陣に追い込まれた。7月10日、新しく選出された公安委員は、バレール、ガスパラン Gasparin、チュリオト T. huriot、ランデ Lindet、ジャンボン・サン・タンドレ Jeanbon Saint André、エロー・ド・セシエル、プリユール Prieur(マルヌ県出身)、クートン Couthon、サンジュストであった。

この九人の委員のうち、クートンとサン・ジュストが最左翼を形成し、のちにロベスピエール派を作ることになる。

² Archives parlementaires, t. 75, p. 299.

³ Archives parlementaires, t. 72, p. 706.

ロベスピエールはこの時期、まだ公安委員会に加入していない。彼は、ジャコバンクラブでもっとも人気が高く、その影響力は大きかったが、カンボンの仕事については、冷静な見方をしていた。彼は、一方で彼のジョンド派にたいする妥協的な態度を非難しながら、他方でカンボンのおこなってきた仕事にたいしては評価するべきだと弁護していた。

この公安委員会に、カルノー Carnot とプリユール（コート・ドール県出身）が参加した。続いてロベスピエールが加わり、最後に9月6日、エペール派を支持していたビヨール・ヴァレンヌ Billaud Varenne とコロール・デルボワ Collot d'Élbois が参加して大公安委員会となり、これが恐怖政治の公安委員会になった。ただし、ガスパランとチュリオは退いた。

カンボンの財政委員会は公安委員会から独立していた

カンボンは公安委員会から去ると、財政委員会に入り、常にその議長であった。そして、財政委員会は、公安委員会から独立を保っていた。⁴このことは注目すべきことである。権限を強められた公安委員会は、内閣を指導し、他の国民公会の委員会を監視できることになっていた。しかし、諸委員会の中で、財政委員会と警察権をにぎる保安委員会の二つは、公安委員会に従属せず、まったく独自の権限をふるうことができたのである。

財政委員会が独立していたということは、国家の財政資金は財政委員会の方針にしたがって支出され、公安委員会は、財政資金を自由に動かす権限をもっていなかったことを意味する。

どれくらいの国家資金が公安委員会の動かせるものであったかといえば、1793年8月2日、国民公会から5000万リーブルの資金が公安委員会にまかされて、これを⁵思いどおり、革命のために使ってよいとされた。

4 F. Bornarel, *Cambon et la Révolution française*, Paris, 1905, p. 295. G. Bouchard, *Prieur de la Côte-d'Or*, Paris, 1946, p. 437.

5 R. Stourm, *Les finances de l'Ancien Régime et de la Révolution*, Paris, 1885, t. 2, p. 423.

この額が、財政支出のどの程度を占めていたかが問題である。1792年10月1日から1793年6月までの財政支出は19億7466万リーブルに達し、このうちの約半分が、⁶アシアの発行によってまかなわれていたという報告がなされている。そして、それ以後は、もはや革命の混乱の中で、財政と会計の報告はなくなった。

公安委員会にまかされた国家資金が、財政支出のうちのわずかな額であることは、この数字からわかる。

インド会社清算をめぐるロベスピエールとの対立

カンボンは、インド会社 *Compagnie des Indes* の解散と清算を担当する委員会にも参加した。インド会社は、王権の保護育成をうけ、東方貿易を独占する特権会社であり、その株主は、国王、大貴族から上層ブルジョアジーに及んでいた。この会社が、反革命のかどで告発され、その活動が停止された。

この事件を審査するために、7月23日五人の委員会からなる財政小委員会 *Commission des Finances* が組織されたが、ここにカンボンが入り、その他ラメル ⁷ *Ramel*、マラルメ *Mallarmé*、ドローネ、シャボ *Chabot* の委員で構成された。

この仕事でも、カンボンはロベスピエールと対立した。というのは、ファブル・デグランチース (ダントン派) *Fabre d'Eglantine* がインド会社にたいするあらたな告発をおこなって、この委員会に入り、インド会社の清算を国家の監視のもとにおこなうべきだと主張した。このとき、カンボンは、もしインド会社が赤字であったとき、小株主にたいして政府が保障するべき義務がでてくるという理由で、清算を会社自身にまかせるべきだといった。

この意見が、国民公会における討論で、ロベスピエールの反対にであった。ロベスピエールはファブル・デグランチースを支持して、陰謀家 (インド会社の理事を指す) の手に会計報告をまかせることは、国家にたいする罪悪だと批判した。この批判を受けると、カンボンはそれ以上反対する意志はないといって、自説を引ッ

6 R. Stourm, *op. cit.*, t. 2, p. 416.

7 *Archives parlementaires*, t. 69, pp. 367 et 601.

こめてしまった。⁸

この事件から両者の共通点と相違点がうかがわれる。カンボンもロベスピエールも、上層ブルジョアジーの組織する巨大株式会社を解散させるところまでは歩調をそろえている。解散の条件について、カンボンは寛大であり、ロベスピエールは、これを徹底的に追求する。株主には、あらかじめ反革命家、陰謀家の烙印をおしてしまっている。ロベスピエールの方針は、つきつめていえば、株主そのものの抹殺である。カンボンは、株主としてのブルジョアは保存しておきながら、その組織する大会社だけを解散させようという。そうした方針のちがいは、さまざまな分野においてあらわれてくる。

ロベスピエールは銀行家を攻撃し、カンボンはこれを保護した

カンボンは、当時の大銀行家ペルゴ Perregaux の味方になって、彼をかばった。

ペルゴはスイス人で、パリに銀行をもち、亡命貴族やイギリス人とも取引をむすび、反革命の陰謀もめぐらしていた。反革命の容疑で、ペルゴにたいする逮捕令が保安委員会から出されたときに、カンボンがその調査を委任された。カンボンは、国民公会での演説で、

「彼は銀行家として富裕である。しかし、委員会は必要な事情を知りつくしているから、国民公会は、彼の資産明細書を公表することを免除するだろう」

と演説した。そうすると賛成の声があがり、国民公会はカンボンの提案を受け⁹いれて、ペルゴとその社員の釈放を決議した。

カンボンは、公安委員会の食料担当委員ランデと協力し、ペルゴを中心とした銀行家、商人の委員会を作り、外国から生活必需品を輸入する計画¹⁰をたてていた。

そのため、ペルゴを保護したのである。のちになって、あたらしい告発

8 Ibid., t. 76, p. 246.

9 Moniteur, t. XIX, p. 34.

10 A. Mathiez, *Autour de Danton*, pp. 239-243.

がおこなわれた。そのときには、ペルゴは1794年3月7日、政府の命令の名のもとにスイスに送られ、逮捕をまぬがれた。

ところが、ロベスピエールを中心とした勢力は、銀行家の告発、逮捕、処刑をめざした。保安委員会のエロン Héron が、銀行家の告発逮捕に活躍し、彼をロベスピエール派の公安委員クートンがその功績を評価してかばった。¹¹

ロベスピエールは、公安委員会の中に一般警察局 Bureau de Police générale を組織して、保安委員会では十分に果せない反革命容疑者の逮捕をすすめようとした。当然、この計画の中に、ブルジョアの中で、まだカンボンやその協力者にかばわれている者を反革命の名の下に逮捕して革命裁判所に引きだし、その財産を没収して、貧しい愛国者に与えるという構想があった。これが、ロベスピエール、サン・ジュスト、クートンの計画したヴァントウーズ法の目標であった。

当時、ヴァントウーズ法は、ジャコバンクラブで強力に支持されていたため、公然とこれに反対することは誰にもできなかった。軍隊はすべて前線にでており、パリの治安は主にジャコバンクラブに頼っている。そこで、国民公会議員の多くは、腹でヴァントウーズ法に反対しながらも、表だって反対はできなかった。カンボンは、のちになって、彼がロベスピエール¹²によって創設された一般警察局に対して非常に憤慨していたと語った。

ロベスピエールによるカンボン財政の攻撃

こうして、ロベスピエール派とカンボンの間には暗闘が続けられ、みぞが深まっていった。ロベスピエール派の政策は、すべてのブルジョアの絶滅政策であり、その財産を没収して、貧民に分け与えようという財産の革

11 J. Bouchary, *Les manieurs d'argents à Paris à la fin du XVIII^e siècle*, Paris, 1939, t. 1, pp. 156-158.

12 F. Bornarel, *op. cit.*, p. 341.

命をめざしている。これにたいして、カンボン、ブルジョアの一員として、そのような政策には反対である。

たしかに、彼は上層ブルジョアジーの極端な投機行為や、彼らの組織する株式会社の優越的な経済力にたいしては闘争した。しかし、ブルジョアジーの社会的存在や、経済活動の破壊にまではすすむつもりはなかった。ここに、両者の社会政策のちがい、社会的地位のちがいがある。

カンボンは地方のブルジョアであり、いわば中流のブルジョアである。ロベスピエール派の代表するものは職人の親方、知識人、小商人など、小ブルジョア層であった。その対立点が、テルミドールの反革命に近づくにつれて尖鋭化した。ついに、ロベスピエールはカンボンをはじめその一味¹³とと思っている者の首を引きわたせと、公安委員会のバレールに要求した。

テルミドールの反革命は、ある意味では、ロベスピエールとカンボンとの対決であった。ロベスピエールは7月26日の国民公会における演説で、彼の政敵を洗いざらい批判した。その中で、カンボンの財政委員会について、徹底的な批判をおこなっている。

「反革命の徒は財政委員会の中にもいる。それは、愛国者の仮面をかぶった反革命の洪水の中で組織されている。財政官僚は投機をあおりたて、フランスの名譽をけがして信用を動揺させ、富裕な債権者を恵み、貧しい者を破滅させ、絶望させ、不平を増大させ、人民から国民の財産をはぎとり、公共の富を必然的に破滅させている。財政の最高の行政官は、ブリッソの徒、フィヤン派、貴族主義者、有名な無頼漢だ。それはカンボン、マラルメ、ラメル、シャボ、ファール、ジュリアン・ド・ツールーズの仲間であり、後継者だ。公共の富を破滅させる投機業者だ……エルミナ Hermina という反革命の偽善者によって指揮されている国庫は、貴族主義者にたいしては支払うが、形式に慎重なふりをして、それ以外の者には支払おうとせず、不幸な市民にたいしては支払いを拒否または延期して、ときにはいまわしい言いがかりによって、緊急の支払いを妨害することに協力している」¹⁴

このように、ロベスピエールがカンボンと財政委員会を批判したことは、

13 A. Ollivier, *Saint-Just et la force des choses*, Paris, 1954, pp. 467-468.

14 J. Poperen, *Textes choisis de Robespierre*, Paris, 1958, pp. 189-190.

とりもなおさず、ロベスピエールの手に財政の実権がなかったことを意味している。もしロベスピエールの手に財政の実権があったならば、自分の思うように財政を運営するから、このような批判をする必要がない。そこに、ロベスピエールの無力さが表現されていて、独裁者といわれたロベスピエールには、意外に実権がなかったことを認めざるをえない。

カンボンはロベスピエール打倒の第一線に立った

ただし、カンボンもまた、この攻撃をうけたかぎり、事態を軽くみてやりすぐすことはできなかった。彼は名指しで攻撃された。そして、やはり、ロベスピエールは独裁者といわれるほどの力を持ち、その背景は、最強のクラブといわれたジャコバンクラブにあった。もしロベスピエールの側からするクーデターが成功するならば、カンボンは失脚し、裁かれることになる。

国民公会の議員は、さしあたりロベスピエールの演説に制圧されて、沈黙していた。そのとき、カンボンが立ってはげしくロベスピエールを攻撃した。

「私は発言を要求する。名誉を傷つけられる前に、私はフランスにむけて話そう……私はどんな攻撃をも恐れない。私はすべてを国民公会に報告している。いまや真理をすべて公表する時がきた。たった1人の男が、国民公会を麻痺させている。今演説したばかりの男、それはロベスピエールだ。そうではないか」¹⁵。

カンボンのこの発言が、国民公会議員の中に潜んでいたロベスピエールにたいする反感を一挙に爆発させ、反ロベスピエール派を勇気づけた。議員がつぎつぎ立ってロベスピエールを批判した。国民公会では形勢が逆転して、ロベスピエールは少数派に転落した。

国民公会で支持を得られないとわかると、ロベスピエールはそのままジャコバンクラブにかけつけて、同じ演説を読みあげて大喝采をうけた。ジ

ャコバンクラブでは、政府は反革命だと宣言され、ついに国民公会とジャコバンクラブの間に決定的な対立が進行した。カンボンは、自分の父親にたいして、

「明日、ロベスピエールか私か、どちらかが死ぬだろう」
と書き送った。¹⁶

対決にそなえて、国民公会とジャコバンクラブの両方が軍隊をかき集めた。そのとき、カンボンは、国民公会議員ルコワントル（ヴェルサイユ出身）の弟を仲介者として、大隊長エスマール Hesmart と面会した。エスマールは公証人で騎兵隊を指揮していたが、カンボンとともに公安委員会、保安委員会と面会し、協力を申し入れた。そのためロベスピエール派の国民衛兵司令官アンリオールが罷免されたあと、その後任に任命された。¹⁷

こうして、カンボンは、ロベスピエールに対立する武力の中核を準備した。翌日、ロベスピエールの発言が国民公会で妨害され、ロベスピエール派の逮捕が可決された。そのあと両者の武力衝突がおこなわれ、ロベスピエール派は敗北して全滅した。この武力衝突のときには、カンボンの役割はみられない。彼は、ロベスピエールを殺すことに直接手を下したわけではなかった。しかし、そのためのお膳立てをしたことはたしかであり、自分の役割も十分に自覚していた。

IV IX テルミドール以後の失脚

滅びゆくモンタニヤールと運命をともにした

カンボンは当面の敵ロベスピエールを倒した。これで彼の地位は安泰になったのだろうか。そう思われたのは、ごく一時期にすぎなかった。彼は、

16 F. Bornarel, *op. cit.*, p. 343.

17 A. Ollivier, *op. cit.*, pp. 511-512.

すぐに、ロベスピエールを殺したことをくやむことになった。¹⁸

なぜなら、彼は、上層ブルジョアジーにたいする闘いを続けるつもりでいた。その力に勝つためには、ロベスピエール派の支持が必要であった。それを切りすてたとたんに、国民公会における上層ブルジョアジーの代表者からの反撃がはじまった。恐怖政治時代の財政政策を、すべて撤廃させてしまおうとする動きが強まった。

もちろん、カンボンは一種の理想主義者として、そのような動きには反対である。彼は、依然として極端な腐敗や投機行為にたいする闘争を続けた。

彼は、バラ Barras の公金横領をあばいた。ところがバラは、テルミドールの日、軍隊を率いてロベスピエール派の軍事力を全滅させた人物であり、国民公会の有力議員になりつつあった。¹⁹ また銀行家ガバリュス Cabarrus と結ぶタリヤン Talien の豪奢な生活を批判した。

テルミドールの反革命の直後、7月28日、国民公会は諸委員会を一カ月ごとに四分の一ずつ改選し、委員をやめた者は、一カ月再選されないことを決議した。これによって、個人に権力が集中することを防いだ。カンボンは、8月25日、十二の委員会に行政権を分散させることを提案し、これを可決させた。

このことによって、公安委員会に集中していた行政権が、それぞれの委員会に分散された。もはや公安委員会は強大な権力をふるうことができず、単なる一つの委員会にすぎなくなった。しかも、公安委員会も保安委員会も、改選がおこなわれるたびにモンタニヤールの議員が落選し、平原派議員とモンタニヤールから転向して平原派と結んだ議員によって固められた。そのうえ、ジロンド派議員の生残りが呼び戻されて権力の一部に喰い込んだ。

18 F. Bornarel, *op. cit.*, p. 343.

19 小林良彰『フランス革命史研究』昭和42年、ミネルヴァ書房、108頁。

こうした傾向と平行して、モンタニヤールの旧公安委員、旧保安委員にたいする攻撃が活発になった。彼らは、ロベスピエールの共犯者という名目で弾劾されはじめた。カンボンは、このとき旧公安委員、旧保安委員を弁護して、平原派の多数に対立した。²⁰

この政争の中で、カンボンは平原派であるにもかかわらず、モンタニヤールの同調者のような立場にすすんだ。やがて、旧公安委員のバレール、ビヨー・ヴァレンヌ、コロ・デルボワと、旧保安委員のヴァイディエを起訴するかどうかについて、国民公会ではげしいやりとりがおこなわれた。そのとき、1795年4月1日、いわゆるジェルミナル Germinal の暴動がおこった。

飢えに悩む群衆が国民公会に乱入し、議事堂を占領した。これが鎮圧されたのち、モンタニヤールにたいする追い打ちがかけられ、バレールをはじめとする旧公安委員の流刑が決定された。こうして、ロベスピエール派を切りすてたモンタニヤールは、今度は平原派と転向者とジョンド派の生残りの攻撃をうけて、減んでいった。

カンボンは、この滅びゆくモンタニヤールを擁護したために、ジェルミナルの蜂起に責任ある者として逮捕状をだされた。ただし、彼はこの蜂起には関係がなかったはずであり、この日彼は結婚していた。²¹しかし、そのまま彼は潜伏し、逃亡に成功した。ここで彼の政治的役割は終った。

のちに赦免されて故郷に帰ったが、もはや政治活動はできなかった。反革命テロが広がったときに、彼は一時銃で狙いをつけられ、逃げ帰ったこともあった。ナポレオンの時代には、自分の農地に引退し、農業に専念していた。ナポレオンの百日天下のときに、再び政治活動をはじめ、外敵の侵入を防ぐために、1792年の愛国的情熱をよびおこそうと訴えた。しかし、

20 F. Bornarel, *op. cit.*, pp. 361-362.

21 *Ibid.*, p. 373.

その後王制が安定するとともに、彼の財産は没収され、略奪された。彼はベルギーに亡命しそこで死んだ。²²

カンボン財政の廃止と政商、上層ブルジョアジーの逆転勝利

カンボンは、平原派でありながら最後はモンタニャールと運命をともにしてしまった。それは、彼の財政政策が、恐怖政治の財政政策であり、恐怖政治が廃止される過程で、彼の財政政策も廃止されなければならなかったからである。

カンボンのあと財政を担当したのは、ラメルであった。ラメルはカンボンよりはさらに右よりであり、最初から、最高価格制に反対していた。カンボンが、条件つきで最高価格制を評価したのは、かなりちがった立場にある。こうした相違が、つぎの財政政策にあらわれてきた。

1794年12月24日、最高価格制が廃止された。カンボンは御用商人の不正取引にたいしてはげしい闘争をおこなってきたが、12月12日、国民公会は、御用商人を保護する命令をだした。

12月27日、経済の統制を解除する方針が国民公会で可決された。12月29日、財政委員のジョアノ Johannot が発言し、交戦国国民の財産を接収した法令を廃止し、財産を返還するという提案をおこない、可決された。これは、敵国民の中にも、フランスで銀行や商業をおこなっている者が多かったので、その取扱いをめぐる方針の対立を示していた。カンボンは、敵国民の財産接収を強力に推進したから、カンボンの方針をくつがえしたものであった。

ジョアノは、カンボンの財政政策を根本的にくつがえした。1795年4月、彼は恐怖政治の財政政策を中止し、パリ株式市場を再開すること、利子、年金の支払を全面的に復活することを提案し、実現した。これは、カンボンが恐怖政治の時代に実現させた政策をすべて元にもどすことであった。カンボンの財政政策では、株式市

22 *Ibid.*, pp. 379, 381, 386, 388, 392.

場を閉鎖し、株式会社を禁止し、3000リーブル以上の年金の支払を停止したからである。²³

こうして、カンボンがすすめた上層ブルジョアジーにたいする闘いの成果は無に帰した。経済界は、昔どおり、パリを中心とする大銀行家、大商人、大工業家の天下にもどった。そして、財政委員のジョアノ自身が、王立ウェッセルラン Wessering マニファクトゥア（繊維と捺染）の経営者であり、大工業家そのものであった。このこともまた、そうした本質をよく示している。

これ以後、フランスで最大の富をもつ者は軍隊の御用商人になった。カンボンが闘争したデスパニャックは処刑された。しかし、シモンのように生き残った者も多い。また新興の御用商人も台頭した。彼らが政商として政府をとりまき、巨大な財産を築いた。

最大の御用商人ウヴラルール Ouvrard が、国民公会の末期から総裁政府の時代にかけて、もっとも華々しい活動を続けた。そこで象徴としてのカンボンとウヴラルールを対比して、

「カンボンの世紀が終り、ウヴラルールの時を告げる鐘が鳴っている」²⁴

という言葉がのこされたほどである。

X カンボンの軌跡から読みとれること

カンボンの軌跡から、フランス革命の性格についていくつか読みとることができる。彼はブルジョアジー出身の革命家であり、自分のおかれた立場の利害を国家の政策に反映したブルジョア政治家であった。

もちろん、フランス革命において、ブルジョアジーは単一のまとまった

23 M. Marion, *Histoire financière de la France depuis 1715*, t. 3, Paris, 1914, pp. 293 et 263.

24 M. Payard, *Le financier G.J. Ouvrard 1770-1846*, Reims, 1958, p. 4.

勢力としては行動せず、危機のたびに、いくつかの派閥に分裂した。大きく分けると、フイヤン派、ジロンド派、平原派、モンタニヤール（山岳派）の勢力に分裂した。彼はフイヤン派でもジロンド派でもなく、平原派とモンタニヤールの勢力の接点に立つような形で、恐怖政治の時代の財政を担当した。

一方で上層ブルジョアジーの活動にたいして抑圧を加えながら、他方で、ジャコバンクラブ、小市民層を代表するロベスピエールの動きに対立した。ロベスピエールが独裁者といわれるほどの名声を高めたときでも、なおかつ財政の実権をにぎり、名をすてて実をとっていた。カンボンが最後まで財政の実権をにぎっていたことは、フランス革命が、恐怖政治の時代にあっても、結局はブルジョアジーの革命としての限界を越えなかったことを証明するものである。

財政の実権は、最後まで、ブルジョアジーの中の誰かの手ににぎられたままであった。カンボンの前には、銀行家クラヴィエールがジロンド派から出た大蔵大臣として財政を握り、カンボンの後には、平原派で大工業家のジョアノがきた。そしてカンボンの時期は、ブルジョアジーの中の もっとも革命的な階層に財政の実権が移ったという評価ができる程度である。

カンボンに代表される中流ブルジョアの利害が、上層ブルジョアジーに対立し、一時的にしろ、上層ブルジョアジーの活動を麻痺させたということとは、それだけでも、市民社会にあっては異常なぐらい革命的だといえる。こうした要素は、他の国の市民革命ではみられない。

しかし、こうした要素を過大評価して、恐怖政治が反ブルジョア的だと考えるのは、行きすぎである。カンボン自身が、そのような反ブルジョア的な動きに徹底的に対立し、ついにロベスピエール派を減ぼす側にまわったからである。

カンボンを軸に恐怖政治をみるならば、恐怖政治とは、ブルジョアジー

の中のもっとも革命的な部分が財政を指導し、その実権をにぎりながら、他の分野では、一時的にロベスピエールを代表者とする小ブルジョアジーと提携しつつ、困難な革命戦争を切り抜けたものといえる。

外国軍を撃退して国境が安泰になったとき、両者の対決がおこり、小ブルジョアジーの勢力はジャコバン派とともに切りすてられてしまう。しかし、それとともに、カンボンの勢力もまた左からの支えを失い、平原派やあるいはテロリストと呼ばれる転向者の反撃の波に押しもどされ、政権の坐からすべりおちてしまう。

こうして、恐怖政治の財政政策はすべて廃止された。残ったものは、平原派とジョンド派の生き残りの提携する国民公会であり、この勢力がつぎの総裁政府の政権を担当することになる。フランス革命が、ついにブルジョア的限界を越えることがなかったという事実を、カンボンの行動の歴史が証明している。

XI カンボンを知ることが明治維新の見直しに通じる

市民革命とくにフランス革命の恐怖政治で、産業資本、あるいは中小生産者層が勝利するというテーマは、²⁵ 広く常識のようになっている。しかし、フランス革命におけるカンボンの役割から見ると、これが事実と違うことを認めざるをえない。もし、ロベスピエールを小生産者の代表者と考えるならば、この勢力が勝利したことはないのだから、そうしたテーマは成立

25 その代表的な文章として、つぎのような解釈をあげることができる。「この上層市民層は、初め王党の、次いでフイヤン党の最後に1793年にはジョンド党の支柱として、急速に反革命の立場をとったが、これに対抗して、モンタニヤール、ジャコバンおよびサジ＝キュロットのうちに自らを代表せしめた『まさに小市民層、即ち中・小商品生産者層こそ、共和暦第二年に、生産様式としての封建制廃止のためのたたかいにおいてもっとも効果的な要素を構成していた。』(高橋喜八郎「総説」『西洋経済史講座』岩波書店、昭和35年、第3巻、50頁。

しえない。

もし、全体として、もう少し規模の大きい産業ブルジョアジーの勝利を主張したとしても、それは成り立たない。なぜならカンボンの立場が、その程度の産業ブルジョアジーの利害を反映しているのに、彼は、結局、フランス革命の最終的勝者となることに失敗したからである。

彼が、上層ブルジョアジーの活動を、中流のブルジョアジーの立場から一時的に抑制を加えたのが、恐怖政治の財政政策であった。

しかし、この政策は永続せず、一年くらいで廃止されてしまった。その過程で、彼自身の政治生命すら断たれた。一時息をひそめた上層ブルジョアジーの側からの揺り戻しがきて、万事がもとの状態に戻された。これでは、勝利とはいえない。

カンボンの一時的成功と、最終的な敗北は、フランス革命で、政商としての御用商人の力が、抜き難いものであったことを、証明する。この点についての認識不足もまた、明治維新と比較するときに、誰もが陥いるワナになっている。

というのは、明治維新のときに活躍するブルジョアジーといえば特権商人しかなく、フランス革命のブルジョアジーは産業ブルジョアジーといわれてきた。そこで、特権商人といっても、三井、住友、鴻池ぐらいしかなく、三菱や安田、川崎は新興ブルジョアジーだと反論したとする。その次にくる反論はきまっている。「しかし、彼らは政商だ」。この一言が、明治維新がブルジョア革命でなく、絶対主義をつくり出したものだという根拠にされてしまう。²⁶フランス革命には、政商の活躍の余地がないと思われて

26 一例として、次のみじかい文章をあげておこう。新興財閥の三菱を紹介したあとでいう。「政商資本の驚くべき生長、だがそれは、彼らが封建支配者と対立均衡するブルジョアジーたることを意味しなかった。絶対主義と政商資本の相互依存関係の密接さにもかかわらず、主導権はあくまでも政府にあった」(遠山茂樹『明治維新』岩波書店、昭和26年、306頁。

いるからだ。

ところが、そうではない。カンボンが必死で闘った相手が、その政商であり、彼は、政商グループを一掃することに成功しないまま失脚したのである。見方を変えて、政商の側からいうと、フランス革命が始まってから、ジロンド派追放の時まで、彼らの全盛期であった。恐怖政治とカンボンの財政政策で、かなり攻撃され、極端な暴利をむさぼった者は槍玉にあげられた。そのためあるものは死んだ。しかし、逃げたものもいた。その差は紙ひとえの差であった。その後すぐにテルミドールの反革命となり、政商に全面的な活動の場が回復された。つまり、政商の活動という側面でも、日本の歴史家の常識とは逆に、明治維新とフランス革命は同じだということになる。